

## 《教育長メッセージ 第49号》

### 『郷土芸能』

海老名市には、地域に根差した芸能として、各地区で受け継がれている「お囃子」「大谷歌舞伎」「ささら踊り」があります。



教育委員会では、郷土芸能祭として、隔年で、海老名市文化会館を会場に、それらの郷土芸能と全国的に活躍している「東柏太鼓」を市民のみなさんに鑑賞していただいているところです。残念ながら、今年度は開催年ではありませんが。

さて、今回は「大谷歌舞伎」について、私が感じたことなどを述べてみたいと思います。

私は、今年、4月10日に大谷の神明社で行われた公演と、10月9日に大谷八幡宮で行われた公演を見に行きました。演目は、両公演とも「絵本太功記十段目・尼ヶ崎の場」でした。

夕暮れ階段を上ると、社の方からお囃子の太鼓と笛の音が聞こえてきます。屋台の前を過ぎると、音と匂いでお祭りの雰囲気が高まります。境内に着くと、はっぴを着た大人や走り回る子どもでにぎやかになっていて、お酒の入った張りのある声や興奮した子どもの声が祭り気分をさらに高めます。そして、なぜか懐かしく感じます。

2回とも、教育委員会の職員が大谷歌舞伎に参加していることから、大谷歌舞伎の役員の方に楽屋に案内していただきました。特に、春に神明社の楽屋は、入り口を見ただけで、私の中の記憶を刺激しました。この光の加減、柱の色、着物の匂い、化粧したおじさんたちの動き……。子どもの頃に、神社を走り回って遊んでいた時に、おそろおそろ覗いた光景がそこにあったのです。

舞台の前には、ビニールシートが敷かれ、椅子が並べられ、(そうそう、昔は、おしろゴザでしたが) 観客が座り出します。観客は、数人ずつでお酒や料理を囲んで座ります。

春の神明社の公演の時、私は、観客として大失敗をしました。大谷歌舞伎を見るときは、車を運転して来てはいけないのです。できれば、お煮しめをつまみながら、日本酒をちびりちびりいきながら、幕が開くのを待たなければならないのです。

その反省から、私は、秋の大谷八幡宮の公演は、車の便利さを捨て、そ

れを叶えました。大満足でした。

鎮守の森は、しだいに暮れていきます。

見上げる木々の隙間の空間に星が輝きだします。

まつり囃子に乗せられて、お酒が進んだ大人たちの会話の声が大きくなってきます。

そして、幕が開くのです。

そのひとときの心地よいこと、何とも言えない幸せな時間なのです。

大谷歌舞伎の舞台については、私があれこれ言うことではなく、ぜひ、一度、見てほしいと思います。と言うより、みなさんの目で楽しんでいただきたいと心から願います。

その時は、車で来ると損をしますよとだけ、言葉を添えます。

私は、東北生まれの田舎者です。大谷の方々のご努力下で伝統を復活させ、継続していただいたおかげで、60歳になって大谷の社で、故郷を感じさせていただきました。

大谷歌舞伎の「とりこ」になりました。

海老名の地の素晴らしい伝統芸能のひとつです。

今回は、50回ということで、「今 教育に思うこと」というテーマで、私の現時点での教育への思いを述べてみたいと思います。